

吉川靈華
《離騷》



吉川靈華(1875-1929)《離騷》

1926年 紙本墨画淡彩・軸装(対幅) 各93.6×136.4cm 平成25年度購入

二

〇一二年の「吉川靈華展」で紹介した靈華の代表作が、昨秋、幸いにも当館のコレクションに加わりました。線を主体にわずかに金や淡彩を添えた白描風で、一九二六年に靈華が十五年ぶりに官展出品した大作です。六月七日からの「MOMATコレクション」展に登場するので、靈華特有の美しい線をお楽しみください。展示は八月二十四日まで。

さて、靈華の作品は、ほぼ例外なく何らかの名宝のイメージを背負っているといえます。その度合いは、どことなく想起させるレベルから、「元ネタ」と一対一で対応するレベルまで様々ですが、この《離騷》にも「元ネタ」とみなせる古典絵画があることが、最近の研究で分かりました。

靈華が参照したとみられるのは「九歌図」という中国の伝統画題です。楚の詩人、屈原による「九歌」十一篇を主題とし、北宋の時代から描き継がれました。いくつかのパターンがあるうち、白描タイプの九歌図に、雲とともに湧出する女神を単身(あるいは供を連れた姿)で描いた「湘君」「湘夫人」の二図があり、本作の右幅の女神像に似通っているのです。ならば主題はどうなのかと、絵と詩句との照合が試みられた結果、やはり主題も「湘君」「湘夫人」の二篇だと確かめられました。長く難解な詩の中から、当時の解釈に従って、描かれたモチーフに照応する詩

句を抜き出して意識するようになります。

「……眺めると浅瀬はサラサラ流れ、見上げると飛龍は身を翻している……」「(湘君)より」、「……あなた(女神)が渚に降臨されたのに、私(屈原)には見えなくて悲しいのです……あなたが招いていると聞き、ともに馬で行こうと思うのです……」(「湘夫人」より)。

すなわち《離騷》は、靈華が難解な古典詩を十分に理解し、古典芸術に対する広範な知識の中から、参照すべきものを正しく参照して描いた作品だったのです。

こうした絵の作り方は、インテリで、蘊蓄を語らせると止まらなかつたという靈華にとっても似つかわしく感じられます。それゆえ、詩の内容と齟齬のあるモチーフがひとつだけ混ざっていることに違和感を覚えます。そのモチーフとは女神の傍らの龍。あえて詩の中に探すとしたら、「……飛龍に乗って北に行き、次に洞庭湖に向かうのです……」「(湘君)より)となるのですが、当時はこの詩句の主語となるのは屈原だと解釈されていたはずで、靈華がそのような間違いをするとも思えません。では、別の「元ネタ」に由来するものなのか。あるいは何かを表現するために意図的に画中に加えたものなのか。これを解き明かせば、きつと靈華の画家としてのもうひとつの側面が見えてくると思うのです。

(美術課主任研究員 鶴見香織)